

国際航空シンポジウム『アジア・太平洋地域の国際航空の将来』
宿利会長 開会挨拶

皆さん、こんにちは。一般財団法人 運輸総合研究所会長の宿利正史です。本日は、「国際航空シンポジウム『アジア・太平洋地域の国際航空の将来』」に、このように多数の皆様にご出席いただき、誠に有難うございます。ただ今ご覧いただきました映像は、先月 8 日に、ワシントン D.C.において開催いたしました本日と同じテーマのシンポジウムの一端であります。本日は先のシンポジウムの議論に引き続き、場所を東京に改めて開催するものであります。

まず、米国国務省のヒューゴ・ヨン運輸政策担当次官補代理、在日米国大使館のマイケル・キャバナー経済公使代行、そして国土交通省の藤井直樹国土交通審議官に対しまして、公務ご多忙の中ご出席いただき、ご挨拶をいただきますことに感謝申し上げます。

また、本日基調講演をしていただき、米国運輸省のディビッド・ショート航空・国際担当次官補代理、国土交通省の堀内丈太郎航空担当審議官、そして成田国際空港株式会社の田村明比古社長に対しましても、感謝申し上げます。

さらに、後ほどパネルディスカッションにご登壇いただき、日米の航空会社 5 社の代表者の皆様に対しましても、感謝申し上げます。

本日もご登壇いただき皆様の多くは、ワシントン D.C.で開催いたしましたシンポジウムでの登壇に引き続き、ご出席いただく方々であり、特に遠路わざわざ米国から来日されご出席いただく 5 名の皆様方に対しましては、重ねて厚く御礼申し上げます。

さて、アジア・太平洋地域の航空旅客輸送については、この 20 年間増加を続けており、昨年は旅客数が 16 億人でありましたが、IATA が昨年発表した予測によれば、2037 年までに、毎年約 4.8%という、世界の各地域の中で最も高い伸び率で成長し、その結果 2037 年には 39 億人に達するとされています。

このようなアジア・太平洋地域の旺盛な航空需要を取り込むため、LCC 事業の拡大、新型機の活用、Joint Venture、新空港や新滑走路の整備等、航空会社間、空港間の競争が激しくなっているのは、皆様既にご承知のとおりであります。

日本においては、来年の東京オリンピック・パラリンピックを目前に控え、さらに今後増大する航空需要に対応するため、羽田空港・成田空港の発着枠の拡大に加えて、成田空港では 3 本目の滑走路が計画され、また、福岡空港、那覇空港では 2 本目の滑走路が建設中であるなど、国内主要空港の機能強化の取り組みが進むとともに、仙台空港、福岡空港などでは、コンセッションによる経営やサービスの強化もまた進んでいます。

特に、羽田空港については、来春からの発着枠の新規増加分について、この8月に日米間の航空交渉が合意に至り、増枠される50便のうち、日米間には最も多い合計24便が配分されることとなりました。今回のこの合意内容は、日本にとって、日米間の航空ネットワークの強化が極めて重要であることを示しています。

このように日米間の航空輸送が拡大していくことは、日米両国の間の経済活動、人的交流を盛んにする上で重要であることはもちろんであります。同時に、東南アジアと北米とを結ぶ航空輸送の拡大を通じて、アジア・太平洋地域の発展にとっても大きな意義を有するものであります。さらにまた、昨今の我が国周辺の国際情勢や、世界におけるパワーダイナミクスが変化しつつある状況において、最も重要な同盟国である米国と日本の関係を、より緊密で強固なものにするという観点からも、重要なものであることを指摘しておきたいと思えます。

本日のシンポジウムでは、所を変えここ東京において、先般のシンポジウムにおける議論を踏まえて、成長するアジア・太平洋地域の国際航空市場において、日・米の航空関係者が取り組もうとする、あるいは取り組むべき戦略やその将来展望について、さらに、日・米の航空が、この重要な地域の発展に対しどのような貢献を果たすかについて、議論を深めていただきたいと思います。

ところで、この機会に、去る11月6日から当研究所の専務理事及びワシントン国際問題研究所長として、奥田哲也が就任しておりますことをご報告いたします。当研究所は、現在のワシントンD.C.を拠点とする活動に加えて、来年、ASEAN・インド地域における活動の拠点として、タイのバンコクに研究・調査活動の拠点を設置する予定であり、積極的に、交通・観光分野の国際的な研究・調査活動、情報発信や外国の政府・研究機関との連携・交流に努めてまいりますので、皆様方のご指導・ご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本日のシンポジウムの開催については、日本財団の特別の支援を受けて実施することを申し添え、また、このシンポジウムが、アジア・太平洋地域における国際航空の将来の姿を照らし出し、日米双方の航空関係者にとって有益なものとなり、さらには日米両国の関係の一層の強化に向けた一つの道筋を示すものとなりますことを期待して、私の挨拶といたします。

本日は、誠に有難うございます。

(以 上)